

お母さんのアドバイス

静岡県 掛川市立城北小学校 五年

坂部

希

毎年六月の終わりにエレクトーンのコンクールがあります。出る子はみんな上手な子ばかりです。

私は、あまり練習が好きではありません。いつも、最後の二週間でしあげます。結果はそこそこです。賞を取れたのは、三年生の時だけ。それを見ていたお母さんが言った。

「今年、賞を取れるように毎日三時間練習やろう。」

私は、「よし。がんばるぞー。」と思った。でも練習は、そんなに楽なものではありません。今年は初めてオーケストラの曲をエレクトーンの楽ふにアレンジしました。またその曲が、「とてもむずかしい」のです。夜、お母さんの仕事が終わった後、練習に行きます。なかなかひけません。そんな私に、いろいろなアドバイスをしてくれました。

「ここをもう少しはきははすと、フレーズの終わりを大切に。」など、いろいろ言ってくれました。でも私は、ひけないことに「イライラ」していた。言ってくれたことが「いやみ」にしか聞こえなくなり、ついに口ごたえをした。

「うるさいな。わかっているよ。」

と、言っていました。そうしたらお母さんが、

「こっちはアドバイスをしてあげてるのに。」

とけんかになってしまいました。お母さんは次の日から、何も言わなくなりました。私は、「何であんなこと言ったのかな。もうバカ。」と、後悔した。私は、ずっと泣いていた。そこに

お母さんが来て言った。

「そんなにつらいんだったらコンクール出るのやめる。」私は「いままで練習してきたんだからやめたくない」と思っていた。

「ううん。やめない。もつと練習がんばる。」お母さんは、

「よし。じゃあいつしよにがんばっていきこうね。」と言ってくれた。私の目には、「きらり」と光るなみだが一つ

ぶあった。その目をお母さんが温かい手でふいてくれた。

「お母さん、ありがとう。」

毎日のとっくんが始まった。その日からお母さんへの想いが変わった。前までは、「うるさい。」と思っていた。でも今は、「アドバイスありがとう。」と思うようになった。毎日、毎日、お母さんのやさしい言葉が心に「花をさかせた。」やっつき本番当日。きんちようしていた。ふるえていた手をとりのお母さんがぎゅってくれた。少しきんちようがほぐれた。ぶ台うらでは「ドキドキ」とむねの音が聞こえた。出番だ。自分のえんそうには、まん足していた。結果発表の時がきた。しょうれい賞ではよばれない。銀賞でもよばれない。「もう無理」と思っていた。でも、金賞で名前がよばれた。うれしかったがとてもビックリした。「お母さん。やったよ。ありがとう。」